

奉祝 天皇陛下 御在位50年



発行者兼編集者
鵜戸神宮
社務所
印刷所
西日本印刷



今年を振り返り

宮司長 友安 美

昭和五十一年も早や師走となり、氏子崇敬者の皆様方には、お正月をお迎えのご準備にて、愈々ご多忙の事と拝察致します。

本年一年間を振り返ってみますと、内外共に大きな出来事がありました。

国内での一番の慶事は天皇陛下御在位五十年を国民挙ってお祝い申し上げた事でありました。陛下には益々のお栄えにて、日本の象徴として内外に幸をお頒ち下さる事と信ずる次第であります。これとは反対に衆議院議員選挙の結果、自民党のちよう落化、ロッキード問題等がありました。

目を外に転じますと、親日国アメリカの大統領選挙の結果、日本は自主防衛を強く要求されるようになり、今までの様に、人の何かを借りての外交は出来な

くなりました。更にE C (欧州共同体)諸国による日本製品の輸入拒否、周辺諸国による漁業専管水域二百カイリ問題等、日本が独立主権国家として自主的に解決を迫られている問題が山積みされているわけです。

かように内外共に多事多難な状況下に於いて、私共は一隅を照らすとでも申すべき地道な神道教化活動を続け、皆様方共々、天皇陛下を中心とする民意の統一に努め、諸問題に対処しなければなりません。

今年一年を顧りみつつ、来るべき新年への決意を申し上げ本年最後のご挨拶とさせていただきます。
どうかご家族お揃いにて良いお正月をお迎え下さいますようお願い申し上げます。

天皇陛下御在位五十年を

お祝いして

天皇陛下御在位五十年奉祝行事は、去る十一月十日を中心として全国津々浦々の神社、あるいは市民団体又は地方行政機関も加わり盛大に執り行われました。この事はマスコミの報道により既に皆様ご承知の通りであります。一部には御用邸からの帰途を待ち伏せての鉄橋爆破計画、皇居へのピッチングマシンによる火炎ビン投入、東宮御所前路上での火炎ビン炎上事件等かなり不穏な出来事もありましたが、十一月十日の武道館での政府行事もつがなく終了した事は、毫に喜ばしい事でありました。斯界の奉祝行事につきましては神社新報紙上に詳細に報道され、夫々御在位五十年の意義を一般の人々に十分にアピールし、更に又ご祭神のご神威の昂揚にも努められた様であります。当神宮にても十一月十日の奉祝祭当日は、役員総代市長町長部落区長等を案内し、中祭式により斎行した次第であります。

そして祭典執行日の十日前か

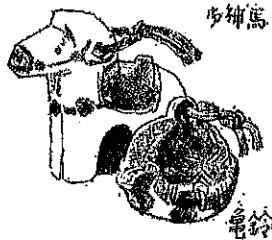
ら新築の楼門前左右に高さ五メートル、巾七十センチの「十一月十日、天皇御在位五十年奉祝祭、鵜戸神宮」と大書した幟一對をかかげ、更に社頭には、神社新報の号外をも配布し参拝者に周知せしめたのであります。この事が大きな効果を収めたようであります。

そして祭典当日は、祭典参列者全員と、丁度参拝の人達にも日の丸の小旗を差し上げ役員の方頭で「天皇陛下万才」を三唱した事は大変な感激を与えたようであります。又一週間前の日曜日には、地元の人達にもふれを回し「奉祝天皇陛下御在位五十年」の幟と子供達の笛太鼓を先頭に、部落公民館より日の丸行進をしたのであります。これも参拝の人達にかなりの宣伝効果を与えたものと思われま

す。その他十一月一日より授与所にては、陛下の御在位を記念して、特別に「ネクタイピンお守」を二千体奉製致し希望者に授与したのであります。

陛下の御在位五十年の奉祝行事がつつがなく執り行われました事は、毫にご同慶に耐えない処であります。また、元号問題が残つて居ります。最近の世論調査によりますと、元号制存続が七〇%を占めてはいるものの、政府的措置は内閣告示に止つて居る現状であります。私共はこれに満足する事なく元号制を法制化する事によつてこそはじめて、天皇陛下御在位五十年のお祝いを貫徹した事になるものと考ふる次第であります。

(香取)



私たちは、十一月七日には、はた行列に参加しました。この日は十一月十日の天皇陛下御在位五十年記念の日に三日早く、日曜日に行われました。この日はとてもよい天気で、十一月とは思えない、あたたかい日でした。子どもやおとなの人が百五〇人ぐらい公民館に集まりました。私たちは一時に集合して、ハッピーに着がえて、日の丸の手ばたや、おうぎを持って一時半に出発しました。のぼりや子どものクッししまいでもありました。とりいを通つて八丁坂へと参道を歩いて行きました。河野商店の前でししまいをしま

はた行列に参加して、八丁坂を登つて、広場で、また、ししまいをしました。公民館を出発して行列を歩いて、いっしょうけんめいにししまいをしたり、大きな声で、「ヨイショ」と声をかけました。鵜戸神宮につき、岩屋の中でししまいを奉納し、社務所前広場に集まつかいさんしました。私は天皇陛下を祝う行事に参加したのは、はじめてですが、何だか胸にジーンとききました。岩屋の中でみんなが「天皇陛下ばんざい」と大きな声で三唱した時、はた行列に参加して本当によかつたと思ひました。

矢野不二男氏の句碑建立

日南市役所 蛭原宗喜

郷土の生んだ俳人・故矢野不二男先生の句碑除幕式が、潮風を背に受けて、九月二十二日午後三時から、日南市立油津中学校校庭で行われた。

矢野先生の略歴について述べてみると、先生は、明治二十八年十月四日、宮崎県南那珂郡油津町(現在日南市)に生まれ、明治四十一年に油津尋常小学校を卒業され、大正十五年に東京主計学校を経て、昭和四年國學院大学附属高等師範部を卒業された。

昭和四年から、宮崎県立飫肥中学校の教諭に任じられ、昭和十六年には、青年学校校長に就任されている。さらに高等官六等の待遇で従七位に叙せられている。終戦後昭和二十二年、油津町立油津中学校長に赴任されたこの頃より、文学好きな中学生を夜間集めて明治文学の話をさせていたものである。

教育に生涯をささげた先生は、油津中学校校歌をはじめ、日南高校などの校歌を数多く手がけられた。日南高校長を退職後は、各学校の国語の教師とし



句碑除幕式

て教へんを取るかたわら好きな俳句や詩作活動を続け「芙蓉」号で多くの師弟に慕われた。「芙蓉」という雅号は、野口雨情先生(叙情詩人)から頂いたものらしい。句碑の建立は、今年で十三年忌を迎えたことから、教え子たち

ちが計画したものである。発起したのは、蛭原宗喜、竹井左馬之亮、山根俊一、井上誠之助、北川昌典、中島淳祐、岡万久光、本田崇久、福島四郎の各氏で彼らは終戦後、明治文学を共に語り明かした面々である。高さ約三メートル、大理石の表面に「登り来て 海をうしなふ 若葉かな」の句が刻まれてある先生の句碑は、永遠に油津中学校の緑の中に、映え互ることであろう。

夏期祭式講習を開催

ないことで、基本をしっかりと身につけてこれを忠実に履行することが専門家たる所以である。」という観点から、基本動作を中心に講習を計画した。

曆の上では初秋の九月中旬であったが、残暑が続く中、日南海岸に鎮座の当神宮儀式殿の講習会場には、二十名近くの神職が県内はもとより、遠く鹿児島県からも参加して、盛大に開催された。

十七日は午後一時より基本動作を中心に、全員が会得、納得するまでくり返し行い、夕食後



句碑除幕式

間だったと、帰途だったのである。

最後に小野先生には御多忙中当神宮までお越し頂き実のある講習会をご教授頂きました。誌上に恐縮でございますが、厚く御礼申し上げます。

素朴な 「こどもかぐら」大好評

去年より復活した「こどもかぐら」は今年も十月三十一日、地元吹毛井部落に鎮座の皇子神社例祭と、十一月二十三日の新嘗祭に奉納された。

前回は十名のかぐら奉仕者で舞ったのが、今回は希望者が多く殺到したため、嬉しむべく愛慮の事となった。が、人選した結果、十九名を今年のかぐら奉仕者として決定した。今までかぐら笛は大人が吹いていたが、子供に教え、子供が吹くことこそが名実ともに、こどもかぐらだといえるわけで、子供にこの事を打診したところ、子供も以前からかぐら笛を吹きたかった、ということだったので、九月初旬より三人の子供が練習することになった。練習は毎週一日づつ社務所にて一時間行い、それに併せてかぐら舞の練習も十月からはじめられた。

皇子神社例祭前までは、かぐら笛もかぐら舞も順調に仕上がりが、奉納の当日をむかえた。皇子神社例祭日は朝からさわやかに晴れたり、絶好のお祭日和となった。併せて吹毛井部落の敬老会、運動会も今年より催



「写真はこどもかぐら」

収めていた。今年のかぐら奉仕者は次の通りである。

- | | |
|-------|--------|
| 増川暢久 | 香取信之 |
| 黒木恵加 | 三輪義郎 |
| 片岡士郎 | 弓矢の舞 |
| 香取 洵 | 外山和彦 |
| 三輪りえ | 外山まゆみ |
| 唐比須の舞 | 村中朋子 |
| 村本里美 | 松尾美保 |
| 劍の舞 | 品村典江 |
| 湯浅享明 | 持原公二 |
| 香取大信 | 津田るり |
| 鈴扇の舞 | 米田しのぶ |
| 津田るり | 長谷川ちづ子 |
| 米田しのぶ | 真柳の舞 |
| 黒木恵加 | 黒木恵加 |
| 三輪義郎 | 片岡士郎 |
| 黒木恵加 | 黒木恵加 |
| 香取大信 | 持原公二 |
| メ太鼓 | 三輪りえ |
| 三輪りえ | 外山まゆみ |
| 手拍子 | 香取信之 |
| 香取信之 | 増川暢久 |
| タンバリン | |

「いさみ太鼓」 油津港まつりに披露

去る五月五日のこどもの日に当神宮儀式殿前広場において盛大に催された「いさみ太鼓」は、百三十名の子供達が集まり全員が大太鼓を叩き、いろいろな舞を踊り、こどもの日を楽しく有意義にすごした。

そこで七月二十四日、当神宮から油津まで御神幸する油津港まつりにおいて、油津港でぜひ「いさみ太鼓」を奉納して下さいという声があちこちからもちあがり、やろうじやないかというところになった。この港まつりは人数に制限があるため、五月五日に参加した五、六年生を中心にメンバーを編成した。鵜戸小学校、潮小学校合同の班は四十五名の子供達、油津海岸地区の二十名の子供達の班と、二班の子供達を選抜、練習に励み本番の日に備えた。

ところが七月二十四日は、あいに台風の接近で中止となり、八月二十八日に延期になった。当日も雨模様であったが、油津港中央突堤に舗設された御旅所前会場には、六十五名の子供達が元気に勢揃いした。午後五時過ぎ神賑市中パレードが終り、午後六時より油津地区

社務日誌抄

- | | | | |
|-------|-------------------------|--------|----------------------------|
| 五月九日 | 宮崎県神社庁南那珂支部総会 | 八月二八日 | 御神幸祭 |
| 五月二八日 | 日本医療法人協会 島根安之助会長他 二〇名参拝 | 九月一七日 | 一八日 祭式講習会(講師 国学院大学小野和輝助教授) |
| 五月二九日 | 福井県神社庁小浜市遠敷郡支部小松信満氏他参拝 | 十月一三日 | メキシコ大使一行 参拝 |
| 六月六日 | 神社本庁参事村岡賢一氏参拝 | 十月一七日 | 神嘗祭当日祭 |
| 六月一四日 | 南那珂神社総代会 | 十月二四日 | 弥彦神社祈宜園禎一氏参拝 |
| 七月一日 | 鵜戸稻荷神社上棟祭 | 十月二六日 | 池田厚子様ご参拝 |
| 八月六日 | 神道新教雲丹亀功士郎氏他参拝 | 十一月三日 | 明治祭 |
| 八月二二日 | 出雲大社平岡権臣司他来宮 | 十一月七日 | 天皇陛下御在位五十年奉祝旗行列 |
| | | 十一月一〇日 | 天皇陛下御在位五十年奉祝祭 |
| | | 十一月二三日 | 新嘗祭 |

職員異動 (4)

- | | | | |
|-------|-------------|-----|----------|
| 六月一日 | 守衛を命ずる | 雑仕 | 平下与平 |
| 六月二五日 | 願いに依り其の職を解く | | |
| 十月一六日 | 斎女を命ずる | 掃除婦 | 育田礼子 |
| | | | 巫子 金丸三喜子 |
| | | | 前園 昭子 |
| | | | 川崎 絹代 |
| | | | 佐藤 ひろ子 |
| | | | 嵯原 京子 |
| | | | 清 美代子 |

鵜戸神宮での実習

大社国学院学生 堀 熊 香 織

私は現在、神職養成所である出雲の大社国学院に在学中で、去る七月三十日より八月五日までの一週間、大社国学院規定の夏期実習を鵜戸神宮で御奉仕させていただきました。

まず結論を先に述べさせていただきますと、神道人としての貴重な経験を得ることができ、大変有意義な実習でした。

鵜戸神宮の事は以前から写真で見たり、人から聞いたりしていたものの、実際に見るその景観は想像以上に美しく素晴らしいものでした。紺碧に広がる大海原と神門、楼門等の朱の調和に見惚れ、数々の奇巖怪礁と洞窟に建立された本殿に驚嘆し、その神秘的に感動させられるのは私ばかりではないと思います。玉橋からの眺めが特に素晴らしいのは周知の通りです。

神社といえど、うっ蒼とした森の中にあるのが、一般の人々の通常の考えでしょうが、鵜戸神宮は例外で、海岸に沿った洞窟内に鎮座されているという特殊の立地条件にあります。また、同神宮は古来、神話伝説に基く深い信仰が続いて居り、現在そ

の信仰は全国に及んでいることと聞きます。これは、御祭神の靈験あらたか、且つ崇高なる御神徳の顕われと思ひ驚き喜ぶことです。

ちょうど夏休みと重なったからでしょうか、遠く北海道、関東、関西方面から、学生をはじめ一般参拝者が連日数多く見受けられました。玉橋より石段を下りた社頭風景は、神妙な面持ちでお参りする人、楽しそうに運玉を投げる人、願かけ絵馬に願い事を書く人等で、連日賑わっていました。やはり神社と言うものは、多くの信者、参拝者で常に境内が賑やかであればある程、神威は益々発揚せられるのではないかと、御守授与所で奉仕中考えることでした。

実習内容は、朝の本殿清掃、御日供、夜の境内巡視は毎日の事とし、日中は授与所を主とし、ご祈禱などの助勢、そして外祭の準備、車の被所等、時に応じて種々雑多の奉仕をさせていただきました。その中で感じたことは、まだ自分の勉強不足ということでした。御日供の際の祭式一つをとっても当然知っていな

ければならない基礎的作法を怠らしたり、同神宮の由緒についても予め概要を知っておかなければいけないのに、それを怠ったが為に、参拝者に質問されたら困った事も度々ありました。その都度、実習生であるからと弁解したり、職員の方に助けられたりしたのですが、こういうことは恥ずべきことでしょうか。又官司様をはじめ職員の方々から、同神宮に関する事柄から、それにまつわる逸話、更には、今後の神道、神道人は如何にありたいかと言った問題などこの道を進む上において、非常に為になる様々なお話を伺えることができたことは、有難く、嬉しいことでした。

あれこれ楽しく奉仕させていただいている内に、早くも最後の日を迎え、宜しくご指導下さいました皆様方とも再会の時を祈りつつ鵜戸の地を後にしました。その後、出雲と並び古くより神話の国と呼ばれる宮崎での旅情を満喫しました。

玉橋より 下る詣人 永遠に たゆることなき 鵜戸の大神

「守る」ということ

権称宜本 部 雅 裕
(九州青年の船宮崎県団員)

私は今度の「九州青年の船」に乗船して、八月二十六日博多港を出発、東シナ海を航行して、二十八日私自身にとって初めての異国の第一歩を、上海に記したのである。

その途中、東シナ海上には軍艦二隻が、我が「にっぽん丸」後方にその灰色に鋭く光る船体を横たえて進行しているようである。船上では韓国の軍艦であるらしいという。日本海や東シナ海を取り巻く我が國を初め中国、韓国、朝鮮あるいは東南アジアの諸國は、それぞれの異なる社会体制を持ち、自國の領土、領海を守ることに懸命である。

さて、日中友好九州青年の船の目的は、先ず第一に各地での訪問地活動により日本、中国兩國間の友好を、我々青年の手によりさらに進めるということ、第二には中国の現状をつぶさに見学し学習して、その成果をして我が郷土を見直し発展に期するということ、この二点があると思う。私は、日中兩國間の友好促進は中国各地での肌と肌と

のふれあい、忌憚のない若者同士の会話などで十分その意を果たし得たと思っている。ここで私が問題としたいのは目的の第二である。というのは、冒頭に述べた自國の領海を守る軍艦を見て、私は「守る」ということについて、國や郷土を守ること、文化、文化財を守ることについて考えることに決心した

からである。そうして我が郷土や青年に欠落していること、あるいは将来とも現状を守っていかなければならないと思うことを考え、これからの参考にしたいと思う。

(1) 先ず文化や文化財に関して旅大市大連人民文化俱樂部において行われた「教育問題について」という座談会で、「中国において歴史教育は、プロレタリア文化大革命後、主に現代、古代、世界史の分野に分けて行われているが、階級闘争、路線闘争を押し進める学習をするため、その内容の比重は、近世、



写真 右上は中国の子どもたち
右下は人民公社内の政治スローガン漢字の簡略化
上は中学生の軍事教練
下は筆者と空気銃を貸してくれた中国青年

織されている。折よくその訓練を沈陽市で見学することができた。これは七才から七十才ぐらいの老若男女が武装し、我々団員の前で標的に向い発砲してみせるのである。規律正しく機敏に動き、堂々と演習を行ってみせるこの軍隊は、國を守る気概を持ち訓練しているという。また中国の一番の仮想敵國はソビエトであるらしく、中国の人口が八億から九億人といわれるうち戦争が一旦始まると六億の人々が銃を持って戦えるという。さらに各地には、地下壕を掘

り戦時に備えている。特に旅大市にある「緑山戦備商店」は地下百メートルの位置にトンネルを掘り、中央には大ホールを設け、まわりにドーナツ状にくり抜いた円周四百メートルほどの壕をめぐらし、現在はこちらをデパートにして生活必需品をそろえていた。また各地の小、中学校にも地下壕を掘り戦争になるとこの地下教室で学習できるといふ。

以上私の見た限りでの中国の現状を、一面的な観察ではあるが述べてみたつもりである。こういう中国の様子を見て私は、文化や、歴史教育についていえば、個人が自由に学習でき、その分野も自由に選択できる我が國の体制の方こそ守って行かねばならないと思う。そして漢字や、孔孟の教えは、もはや中国には原型すらなくなりかけている。この東洋の文化を守り育てて行く人々は、もう日本人以外にないといえよう。

次に國を守ることに関してであるが、中国は中國の社会体制があり、その中で中國青年は、自國の発展のため骨身を



(付) 「九州青年の船」は、九州八県とそれに沖繩県の青年男女がアジア諸國を訪問しその友好親善を進めることをねらっている。今まで五回実施されているもので、中国訪問は今年で三度目である。

惜しまず社会に奉仕している。私はこの現実と、日本青年の平和のうちに安閑とした日々々の生活を送り、國や郷土や、文化やさらには家や親兄弟をも忘れてしまった自己中心の姿とを比べ

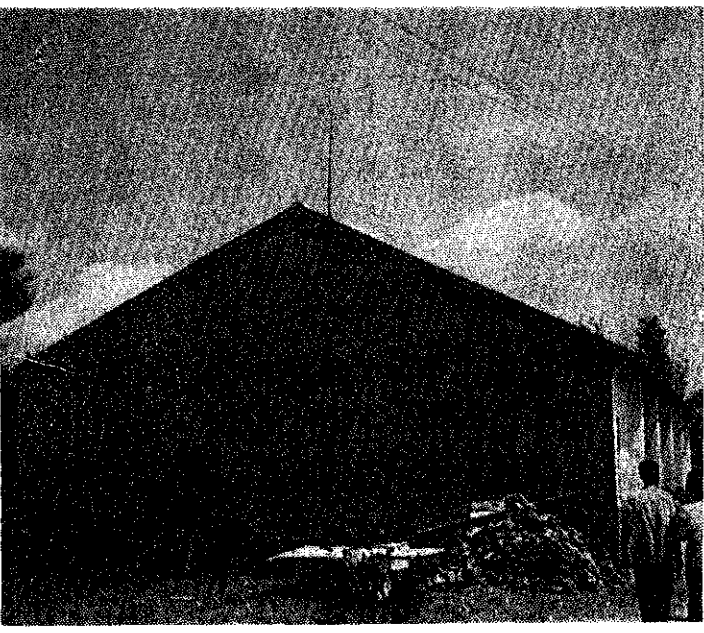
てみると、団体生活の中に、生きる中国青年の目の輝きの中に、日本の社会にはない一種の羨望を覚えたのである。

とくに革命後の現代史に重点を置き、中世や古代は少しだけ教育をする。という中国側の解答があった。

また、東洋最大の文化だと(私は思う)漢字について、現代中国では「業」は「産」に「義」は「文」に、「産」は「産」に、というように漢字の簡略化が行われている。倫理面において、日本にも非常に大きな影響を及ぼした儒教は、林彪を批判するのと同じように、孔子を「批林

批孔運動」の中で徹底的に批判することが行われている。文化財については、沈陽市の「故宮」を訪れただけであった。

故宮は清朝第一代、第二代皇帝の皇宮跡で今から約三五〇年以前の建物で、色彩のあざやかな瓦や彫刻、大理石、当時の遺物など見事なものであった。(2) 次に國を守ることに關して中国の軍隊は人民解放軍である。他に民兵の組織があり、これは職場、学校、地域単位に組



鵜戸山散歩(4)

神猿? について

古来より神使・神のつかいとして、春日大神の鹿、八幡大神の鳩、稻荷大神の狐、山王大神の猿などは、神道の信仰のうえに重要な役割を果して来た。ある意味では、こういう動物達の愛嬌のある仕種や顔たちが、人間にとって神をより身近に感じ、一層信仰を深くして来たといえるのではなからうか。

ところで、鵜戸神宮とサルとの猿(エン)は密接なものがある。遠く当宮が鵜戸山大権現仁王護国寺の勅号を賜わり、両部神道の大道場であった時代には、伊勢の出身の日向守愛洲移香が鵜戸神窟に参籠し剣法の奥儀を悟り、これが後に「陰流」を創めたものであるという。

『異称日本伝』巻中には、

日向守愛洲移香、磨霜刃年久、詣鵜戸権現祈業精、夢神頭猿形示奥秘、名著千世名家日陰流

とあり愛洲移香は鵜戸大神に折り、夢に神猿を見て剣法の奥秘を覚ったものである。また、その流れをくむ神陰流の手法には「猿飛」「猿回」などがあり、当宮とサルとのつながりが多く

ッとのぞいていかれたという人。はたまた参道わきの商店街では、土産品のクおちちあめクが盗まれ、お客さんに飛び付き、けが人まで出してしまおうというサルの悪業であった。

それを聞いて、これ以上の被害を出させてはならじと、地元商店街、消防団、駐在所、それに当神宮職員合同で、サルの生

けどり作戦が計画、実行されたのである。

ところが当のサル君鵜戸山は生れ在所。お山の一本一草まで知りつくしていると思え、いっそうに捕まえることができないある日の午前十時ごろ、生けどり作戦を尻目に今度はサル君、大胆にもご本殿前に現われ、頭をかいたり、参拜の新婦さんをうらやましそうに眺めたり。

後には本殿のお鎮まりになる岩屋前の海岸にある亀石に飛び降り、お詣りの人が投げる「運玉」のひとつを手にとっては口へと運ぶ。「これは食えない。」と思っか、あきらめ顔にスタコラ階段を上がり、お守り授与所の前で参拝者を眺めひと休み。

(写真)

この後、なんと社務所内に入りこみ宮司室へ。先ずは宮司にあいさつとばかり、腰を落ちつけて動こうとしない。しびれを切らした宮司からごほうびの「せんべい」を頂いて、お山へ消えてしまった。

以上サルにひっかきまわされた鵜戸山一円であった。しかしこのサル、愛洲移香をして剣の達人と言わしめた神猿であるかどうか定かでない。

編集後記

本紙第八号をお届けします。南国うどさんにもいいよいよ冬がやってきました。しかし他の地方に比べると温暖な気候で、雪はもちろん霜も降ることはありません。それでも正月が近づくと、寒さは厳しくなってくるものと思われまます。

さて、今号の「鵜戸さん散歩」は「猿」のことがテーマになっていますが、つい最近、今度は「猪」が境内に出没し、一騒動がありました。ハンターが猟犬を引連れて、二、三日山狩りした結果、猪は昼間、国道に現われました。大勢の人が集まりましたが、仕留めたのは七十三才の老人でした。木払ナタを使つての大奮闘で、若者達はただ傍観するだけでした。「猿」、「猪」、「コウモリ」、「イルカ」、「亀」等いろいろな動物たちとの出会いが楽しいうどさん地方ですが、若者よ、もっと勇氣を出しましょう。

昭和五十一年も残りわずかです。皆様方のご健康と、新年がよい年でありますことを心からお祈り申し上げます。



(本部)